

# 富士山を世界文化遺産に!



World

写真提供：沼津市観光交流課

## 平成21年度は『仕上げ』の年

昨年11月、海外の世界遺産専門家から「富士山の顕著な普遍的価値は『信仰』と『芸術』の観点から証明可能」との助言を受けました。

このことから、昨年11月以降、静岡県内の構成資産候補25件について、『信仰』と『芸術』の観点からの価値の再検証を行っています。

そして、この再検証の結果を本年7月を目標に取りまとめ、9月開催予定のイコモス（ユネスコの世界遺産に関するユネスコの諮問機関）関係者による「国際専門家会議」に意見照会し、構成資産を最終決定します。

9月以降は、決定した構成資産の「国文化財指定に向けた作業」（未指定の資産のみ）、「保存管理計画の策定作業」と併せて「推薦書原案の作成」など登録に向けて必要な作業を「気呵成に行うこと」になります。

これらの作業の完了なくして、富士山の世界文化遺産登録実現はありません。平成21年度は、平成22年7月の推薦書原案提出に向けてのまさしく『仕上げ』の年なのです。

### News List

- ◎『富士山の信仰』（静岡県学術委員会委員 中村羊一郎）
- ◎シリーズ「構成資産候補の紹介」 『人穴富士講遺跡』
- ◎世界文化遺産登録に向けて『平成20年度事業成果の紹介』

# 富士山の信仰

浜松市の井伊谷に三合山さんごうやまという小さな山がある。むかしダイダラボッチという力持ちが富士山を造ろうとして琵琶湖の土を運ぶ途中、こぼれおちた土がこの山になったという。同じような話は各地に伝わる。日本一の富士山のなりたちを説くにはこれくらいのスケールが必要である。

人びとが仰ぎ見る富士山は、噴火を繰り返す神そのものであった。その神をなだめ世の平安を祈る場所が浅間神社の始まりとなった。平安時代、そのような願いをこめて富士山に登ること数百回、富士上人といわれた末代は山頂に大日堂を建立して多くの経巻を埋めたと伝えられる。

中世になると先達に率いられて山頂をめざす道者が増えた。東海道からは、浅間大社の鎮座する大宮（富士宮市）を経て村山（富士宮市）へ、というコースが一般的だった。村山では大日如来をまつ



静岡県学術委員会 委員 中村 羊一郎  
(静岡産業大学 情報学部 教授)

る興法寺があり、別当職を務める修験者により道者宿泊のための宿坊が開かれていた。山梨県側の吉田口には、御師と呼ばれる富士信仰の宗教者の家が建ち並んだ。これも道者を泊めて世話をする宿坊であった。

これらの登山拠点は、それぞれ今川氏・武田氏の保護を受けた。各地からの道者が落とす金は地域経済の支えになったし、彼らもたらす情報が戦国大名には魅力だった。修行を通じて肉体的にも優れた能力を獲得していた修験者たちは、謀者としても活躍していたらしい。

江戸時代になると、江戸の町では富士をあがめ富士登山を目的とする富士講が大流行した。信者たちは、食身身緑の説いた真面目な生き方や男女平等に心を惹かれ、身祿終焉の聖地、富士山を目指した。富士登山が広く庶民の世界に開放されたのである。彼らは比較的登りやすい吉田口を利用したので、吉田口は大きな賑わいを見せる。御師たちは関東地域に多くの信者を持ち、毎年ひいきの村々を訪れ組織の拡大と維持に努めた。千葉県館山市で、富士講の集まりを見たことがある。富士山を望む海辺の高所に掛け軸をかけ、白装束の講員がそれに向かって祈る。集落には富士山に百回登ったという先達の立派な石碑が建っていた。

いっぽう静岡県側の村山修験は、毎年の登山期前に富士行と称して周辺の村々で祈祷をおこない、地域との密着を図つ

た。また伊豆半島の海岸部をくまなく巡り、富士山が海上安全、大漁満足の神でもあるという信仰を広めた。漁師や航海者にとつて富士山は海上で自らの位置を測るための目印でもあった。

村山修験は、東海道を利用する西日本人々に強い影響力をもった。三重県などには身近な山に浅間神社を祀り、富士登山を年中行事とする信仰組織がたくさんある。また焼津市あたりでは、村の若者が二十歳になると、同年配の仲間が近くの川で禊ぎをし、そろつて富士登山をする習慣があった。富士登山は成人儀礼でもあった。明治以降の学校行事に富士登山が組み込まれたのも、このような古来の観念を無意識のうちに着つてきたものだろう。

近代のスポーツ登山以前に多くの一般人が安全に日本の最高峰を極めることができたのは、駿河・甲斐ともに、登山者の勧誘、受け入れ、宿泊、登頂、下山に至る行程が、システムとしてきちんと整備されていたからだ。

富士山は、信仰の対象として仰ぎ見るだけでなく、そこに登ることによって心の平安を得ることができる聖なる山である。富士山の魅力にとりつかれて、カメラを向ける現代人も、よい写真を撮りたいと通い詰めるうちに、富士山の魅力を擬人化して語り始める。科学技術の最先端に位置するこの国にあつて、その対極にあるはずの、もっとも原始的な山岳信仰がしっかりと息づいているのである。この西欧的合理主義とは異なる独自の思



想は、文明の多様性を示すものであり、その中核が富士山なのだ。その意味で、富士山は、まさに世界文化遺産にふさわしい。

ひとつ提案がある。富士山に関わるさまざまな信仰の実態を、両県の地元博物館が協力し合い、その総力をあげて学術的に追求し、合同展示会を各地もちまわりで開催するのである。掛け声だけでいい、具体的な広報活動があつて登録に向けての県民運動を盛り上げることができよう。いや、むしろ登録後にこそ、これらの蓄積が必要になるのである。

今回は、富士山信仰の二形態である富士講に関わる遺跡「人穴富士講遺跡」を紹介します。

## 「人穴」とは

富士宮市北部、朝霧高原に「人穴」という長さ約83mの洞穴があります。この溶岩洞穴は約一万一千八千年前、富士山の側火山の一つ犬涼み山から流れ出した溶岩の中に形成されました。この人穴の西側には、浅間神社とともに一見お墓のように見える「碑塔」が約230基並んでいます。これらは主に江戸時代中期以降に建てられた富士講関係者の供養碑や記念碑です。

富士講とは、16〜17世紀にかけて活躍した長谷川角行（本名・長谷川左近藤原武邦）の教えを基に成立した富士山に対する信仰です。仙元大菩薩（富士講での富士山の神の名・万物の根源とされる）を信仰し、富士登拝・御中道巡りなどによる修行と「焚き上げ」などの祈禱により、人々を救うことを目的とし、18世紀半ば以降、江戸を中心に流行しました。

人穴は富士講の人々にとって、開祖とされる角行が修行し、入定した聖地であり、「浄土人穴」「西の浄土」と呼ばれ信仰された場所でした。



人穴の内部（富士宮市教育委員会提供）

## 人穴で修行した富士講の開祖

富士講関連の文書によれば、角行は天文10（1541）年長崎に生まれ、戦国の乱世に暮らす人々を救おうと主に関東・東北で修行を行い、その過程で役行者（修験道の開祖とされる人物）のお告げを受けます。それは、人々を救うには人穴に籠もり、世界の中心である仙元大日神（仙元大菩薩）に願うようにというものでした。

彼は永祿元年（1558）人穴に到ると仙元大日神の使いの言葉に従い、四寸五分（約14cm）四方の角材の上での立行など一千日の修行を達成し、この行にちなんで角行東覚という名を授かったとされています。

なぜ彼に人穴へ行けとのお告げが下ったのでしょうか。それを解く一つの鍵が、鎌倉時代の歴史書「吾妻鏡」に見られる人穴にまつわる話です。

あらずじを紹介すると、建仁3（1203）年、二代将軍源頼家の意をうけ人穴探検に出発した仁田（新田）四郎忠常以下6人は、穴の中で大河に遭遇し、その向こう岸に火の光が輝く「奇特」を見ます。すると家来のうち4名はたちまち死んでしまい、仁田らは頼家より賜った太刀を川へ投げ入れ、命からがら脱出した、という内容です。この後には古老の話として、「人穴は浅間大菩薩（当時一般的であった富士

山の神の名）の御在所であり、昔から敢えてそこを見ることはしなかった。この次第は恐ろしいことである。」と付け加えてあります。

この内容は角行の活動した室町時代末期になると「富士の人穴草子」などの神霊説話となり多くの人に読まれた。これにより人穴は「浅間大菩薩の御在所」として有名になり、角行を呼び寄せたのでしょうか。

その後も人々の救済のために各地で修行を続けた角行は、正保3（1646）年人穴において106歳で亡くなったとされています。



人穴で修行中の長谷川角行（富士宮市教育委員会提供）

## 人穴への信仰

角行が修行した場所とは言え、その後も人穴は人々に畏れ敬われ、一般人には近づきがたい場所でした。しかし、18世紀、角行の教えを引き継ぐ食行身祿（※1）や村上光清（※2）といった人々の活動により富士講が成立し、18世紀後半より19世紀前半にかけて江戸を中心として関東一円で流行すると、人穴は角行の修行の跡をたどる巡礼地のひとつとなり、多くの富士講の人々が参詣するようになりました。

文政6（1823）年の「富士日記」

によれば、穴の中に籠屋が設けられ断食修行等を行う人がいたことがうかがえます。人穴の周囲には富士講の各講社（信者のグループ）によって、勢力を競うかのように角行・身祿らの供養碑や富士山に一定回数以上登る等の大願を成就した記念碑が建てられました。また、人穴の中にある水の底にたまった赤土は「御あか」と呼ばれ、万病に効くものとされていました。

この様に人々の信仰を集めた人穴は、第二次大戦の影響で転機を迎えます。昭和17（1942）年、人穴周辺は旧陸軍の少年戦車兵学校演習地となり、翌年には人穴浅間神社とともに人穴村全体が強制移転させられました。また、富士講はその中心地の東京下町等が空襲で壊滅したことにより、多くの講社が廃絶してしまいました。戦後、村と神社は再興されましたが、人穴を訪れる人は減少しました。しかし、富士講の流れを受け継ぐ人々による人穴への参詣は現在でも続いています。



人穴周辺の碑塔群（富士宮市教育委員会提供）

※1 1671~1733 「乞食身祿」とも呼ばれ、貧しい生活の中で庶民救済を目指し、富士山の烏帽子岩（現吉田口八合目付近）で入定した。

その後弟子の活動で信者が拡大した。このグループが富士講を大きく分けた際の一派となった。

※2 1682~1759 食行身祿に対し、裕福な商人で「大名光清」と呼ばれた。私財をもって吉田口登山道の北口本宮富士浅間神社の修復を行った。光清の活動で拡大したグループがもう一つの富士講の一派である。

# 世界文化遺産登録に向けて

## 平成20年度事業成果の紹介

登録推薦書を作成する際、各構成資産が万全な体制で保護されているということを確認する必要があります。そのため、今年度は、構成資産の国文化財指定に向けた業務と、構成資産を将来にわたって保存管理・活用するための保存管理計画の策定を行いました。

### 1 発掘調査など

富士山信仰に関わる構成資産を国文化財（史跡）に指定するため、静岡県埋蔵文化財調査研究所に4件の発掘調査等を委託しました。発掘調査の結果は、報告書として刊行しました。

#### ①富士山本宮浅間大社

境内地の範囲を確認するため、地形測量を実施し、地形図を作成しました。社殿裏側の神立山を掘削したところ、江戸時代の絵図に見られる建物の柱穴列や石組みを発見しました。特に、護摩堂跡の調査では3間×4間の礎石が現れ、建物の全体構造が把握できました。

#### ②山宮浅間神社

境内地の範囲を確認するため、地形測量を実施し、地形図を作成しました。

この場所が富士山の遥拝所として使用されていたことを確認しました。



【護摩堂礎石跡】

#### ③村山浅間神社

宿坊跡の地形測量を実施し地形図を作成するとともに、宿坊跡の一部を確認しました。

### 2 保存管理計画測量業務

④山頂信仰遺跡、大宮・村山登山道跡  
富士山頂に所在する信仰に関連の深い建物や石像仏について、位置測量や写真撮影を実施し、分布図を作成しました。登山道跡については、過去に富士宮市が実施した調査結果をもとに現況調査を行い、遺構を確認しました。

御殿場市に所在する「駒門風穴」「印野の熔岩隧道」の調査を行いました。

調査内容は、地形測量、レーザースカニング調査、動植物・地質調査の3種類です。

このうち、レーザースカニング調査とは、洞穴のような複雑な形状でも、短時間にかつ正確な3Dデータを取得できる調査方法です。360度レーザーを飛ばすことで、洞穴の形状が瞬時にデータとなつてパソコンに現れます。地中に延びる洞穴が、どの位置にどのような形状で存在するかを知ることができます。

「駒門風穴」「印野の熔岩隧道」は国の文化財指定年代が古く、詳細な資料も少ないため、今回の3種類の調査で最新の状況を把握することができました。

この調査結果をもとに、来年度保存管理計画を策定します。



【印野の熔岩隧道3Dデータ】

### 3 保存管理計画の策定

保存管理計画とは、文化財としての価値や構成要素を守り、将来にわたって確実に継承していくため、適切な保存管理の方法及び整備活用の方策を定めるものです。

今年度は、富士宮市の富士山本宮浅間大社境内地に所在する国特別天然記念物「湧玉池」と、三島市立公園楽寿園内の「国天然記念物及び名勝「楽寿園（小浜池）」の2件について保存管理計画を策定しました。

なお、策定にあたっては、専門家・有識者や地元関係者等で構成される保存管理計画策定委員会において、いずれも4回の審議を行うとともに、文化庁や市、所有者等とも調整を重ねました。